研究ノート

メイベル・L.・トッドの見た「アイヌ」
―*Corona and Coronet*の作品を中心に―

梅　本　順　子

The Ainu People Mabel L. Todd Saw

Junko UMEMOTO

Mabel L. Todd, editor of Emily Dickinson's Poems, and essayist, visited Japan twice in 1887 and 1896, accompanying her husband who was the leader of the Amherst Eclipse Expedition to Japan. In 1896, the station for the observatory was placed in Esashi, Hokkaido. Mabel had a chance to meet the Ainu people there. Mabel, following the advice of Edward S. Morse, zoologist and anthropologist, actively collected numerous things related to the Ainu people and their lives, and wrote several essays about them. Her essays were published under the title of *Corona and Coronet* in 1899. In this article, I will discuss what she saw and heard from the Ainu people, and compare it with *The Unbeaten Tracks in Japan*, 1880 written by her predecessor, Isabella Bird.

はじめに

隠遁の詩人であるエミリー・ディキンソンの詩の編集者（ディキンソンの詩が世間に知られるようになったのは，編集者としての彼女の才知と努力の賜ともいえる）であり，エッセイストとして活躍したメイベル・L.・トッド（Mabel Loomis Todd, 1856-1932, 以後は夫と区別するためにメイベルと呼ぶ）は，2度にわたり夫のディヴィッド・P.・トッド（David Peck Todd, 1855-1939）がアマースト大学の皆既日食観測のために観測隊を率いて来日した折に，同行している。最初の観測地は，1887年の福島県白河であり，二度目は1896年の北海道の北見地方の枝幸（えさし）であった。初回には，観測の後，夫らと富士登山をした。二回目は，先に設営のため北海道に向けて出発した夫らとは別行動をとり，関西方面を旅した後，観測隊に合流するため北海道まで一人旅をしている。

本稿では二度目の来日の際にメイベルが観察した日本各地の諸相の中から，特に北海道で熱心にその姿を追ったアイヌの人々，ならびにその文化について記した一連のエッセイを中心に彼女のアイヌ観を追う。北海道のアイヌの生活や文化に関わるエッセイは，当初アメリカで，『アトランティック・マンスリー』や『ネーション』をはじめ複数の雑誌に発表された。後に，33章からなるエッセイ集*Corona and Coronet*，1899（『皆既日食とコロネット号』）(1) として出版されている。この作品集は文字通り，来日時に乗船していた大型ヨットのコロネット号の航海記録であると同時に，アメリカを出立して，途中立ち寄ったハワイ諸島での原住民の生活，並びに彼女が訪れた日本各地の風物の描写からなる。

来日目的は，すでに触れたように，夫の皆既日食観測に同行してであったが，彼女自身，エッセイストとして，自分の眼で見た日本の姿を積極的に発信したのである。1896年の来日は，二回目

ということもあって，前もって目標をたて，より積極的に活動できたのではなかろうか。特に今回取り扱う北海道のアイヌに関するエッセイが『皆既日食とコロネット号』の25章から30章を占めている背景には，動物学や人類学の分野で足跡を残したエドワード・シルベスター・モース（Edward Sylvester Morse, 1838-1925）の依頼で，マサチューセッツ州セイラムのピーボデイ博物館のためにアイヌ部落を回って文化や生活に関わる用品を収集することになっていたとメイベルは述べている[(2)]。

コロネット号には，アマースト大学の皆既日食の観測隊の関係者のほかに，観光目的の人々も含め9名が乗船していた。皆既日食は8月9日であったが，観測基地を準備する必要があったために，コロネット号は6月22日に横浜港に到着した。夫ら観測隊員は7月1日に北海道の枝幸をめざして出立したが，メイベルらの観測にかかわらない者は観光を楽しむことになり，関西地方や瀬戸内海まで足を延ばした。しかし，観測にも立ち会いたいメイベルは，一人7月23日に神戸港を出立し，26日に横浜港を経て，海路で北海道を目指した。最終の目的地である北海道の枝幸には，8月5日に到着している。

これまで述べてきた，メイベルの旅程を補完するものとして，メイベル自身の『皆既日食とコロネット号』に加え，作者は不明であるが，6年にわたるコロネット号の航海日誌である『コロネット号の思い出』（*Coronet Memories: Log of Schooner-yacht Coronet on her Off-shore Cruise from 1893 to 1899*）[(3)]と題する書物がある。詳細な航海情報に加え，メイベルや観測隊についての記述も見られる。本稿ではこれら2冊を参考にメイベルの旅をみてゆくことにする。

モースとバード

モースがメイベルにアイヌ関係の生活用品の収集を依頼した背景には何があるのか。しかもなぜアイヌに関心を持つに至ったのかを含めて，19世紀末に欧米諸国が競って北海道を目指していた状況に触れておく。

モースは，明治初期にシャミセン貝を求めて来日したが，東京帝国大学で教壇に立って動物学の講義をし、かつ進化論を説いた。また，大森貝塚の発見をはじめ，多くの偉業を成し遂げている。その代表作が『大森貝塚』（*Shell Mound of Omori*, 1879）と題する書である。『大森貝塚』は，“Memories of Science Department, University of Tokio Japan, Vol. 1, Part.1”として，同年7月に出版されたものである[(4)]。その前年の1878年の7月13日よりモースは50日に及ぶ北海道地方への調査旅行をしており，その結果，「日本太古の民族の足跡」（”Traces of an Early Race in Japan”）と題する論文を『ポピュラー・サイエンス・マンスリー』（*Popular Science Monthly*）の1879年1月号[(5)]に発表している。この内容は，貝塚から発掘された骨やその他の資料から，食人の習慣があることが分かった大森貝塚の人々は，アイヌに先行する民族であるとするものである。これが「プレ・アイヌ説」のもとになったという。

人類学者の池田次郎は，モースは後の人類学的な「コロボックル論争」の前哨戦として「アイヌ説」対「プレ・アイヌ説」論争の一端を担っていたと結論付ける[(6)]。さらにモースの考えをまとめて，「彼は大森貝塚から土器や食人風習を思わせる細かく粉砕された人骨が発見された事実は，この貝塚を残したのがアイヌであるという見方に矛盾すると考えた。何故ならば，アイヌは，エスキモー，アリュート，カムチャダールなどと共に土器を制作していないし，また彼らの性質は温和で，食人風習を行ったことはないことがアイヌ民族の研究から明らかにされているからであって，大森貝塚を形成した人々は，アイヌ居住以前に日本に住んだ有史以前の人種，プレ・アイヌであろうというのがモースの説である」[(7)]と述べている。

モース自身，すでに触れたように，1878年に北海道を旅してアイヌ関係の文物を収集してきたが，自説を裏付けるために，より多くのアイヌ関係の資料がほしかったのだろう。それがメイベルにアイヌの文物の収集を依頼した理由だと考えられる。後年，日本滞在中書いた日記をまとめて出版した，モースの『日本その日その日』（*Japan Day by Day,* 1917）[(8)]には，彼の北海道旅行の記

録が含まれている。モースの旅程は，横浜から船で北海道をめざし，函館より日本海に出て小樽に行き，そこから陸路を馬で進み，アイヌ部落などを回るというものだった。それから札幌，千歳を経て室蘭から乗船し，函館経由で青森に戻ったのが8月17日とのことなので，一月近くが北海道で費やされたことになる。

24章からなる『日本その日その日』のうち，1878年の北海道訪問については12，13章の2章が割り当てられている。挿絵が多いのが特徴で，「アイヌ」という題の13章には44ページの本文中にアイヌの人々の姿，生活用品，アイヌ部落付近の景色と57もの関連するスケッチが入っている。

既に触れたように，モースの『大森貝塚』は人類学に一石を投じることになったが，それと同時に人類学の見地から欧米人のアイヌへの関心が高まっている様子がうかがわれる。欧米の研究者がアイヌに対して関心を寄せていた背景について，中西道子は，『モースのスケッチブック』の中で，北海道がロシア艦隊の南下コースの途上にあること，ならびに開国以来アメリカの捕鯨船の寄港で，小樽近郊のアイヌ村落のことは日本国内より欧米で知られていたことを取り上げている[(9)]。

ところで，メイベルより早く北海道を訪れた女性に，英国のイザベラ・L.・バード（Isabella Lucy Bird, 1831-1904）がいる。日米交流にかかわった人物を多く取り扱った『グレイト・ウェイヴ』（*The Great Wave; Gilded Age Misfits, Japanese Eccentrics, and the Opening of Old Japan*, 2003）の作者クリストファー・ベンフィー（Christopher Benfey）は，メイベルがアイヌ部落に立ち入った西洋人最初の女性としているものの，バードが書いた『日本奥地紀行』（*Unbeaten Tracks in Japan*,1880）によれば，メイベルよりも18年も早い1878年に，バード自身が北海道南部の平取（ビラトリ）のアイヌ部落に滞在したことがわかる。バードの旅，特にアイヌ探訪については，駐日英国公使のハリー・S.・パークス（Harry Smith Parkes,1828-85）が，周到に準備しており，その支援を受けてバードが実行したと，金坂清則は，『イザベラ・バードと日本の旅』で複数例を挙げて証明している[(10)]。パークスのみならず，英国の大使館員のアーネスト・サトウ（Ernest Mason Satow,1843-1929）や東京帝国大学の教壇に立っていたバジル・ホール・チェンバレン（Basil Hall Chamberlain, 1850-1935）などの英国人のほかに，アメリカ人のヘボンことジェームズ・カーティス・ヘップバーン（James Curtis Hepburn, 1815-1911）や幕末に出島に来航した医師シーボルトの次男ハインリッヒ・シーボルト（Heinrich von Siebold,1852-1908）などの多くの欧米人たちが，それぞれが得意とする分野でバードのアイヌ探訪を支援したことを，バード自身，『日本奥地紀行』において語っている。

以上を先ほどのモースのアイヌ探訪とつきあわせれば，西洋人の「アイヌ」に対する関心の高さの表れとみることができるだろう。モースは，イザベラ・バードに批判的だったといわれるが，そこには米英の対決構図があったとのことである[(11)]。モースの東京帝国大学での「進化論」の講義に対し，日本滞在のキリスト教の宣教師らはなんとしても阻止しようともくろむなど，モースと英米の宣教師たちの不仲はよく知られているが，キリスト教とは距離を置くモースは生涯日本贔屓でもあった。そのようなモースは，アメリカが幕末に下関砲撃事件の賠償金として取り立てた金額が，蒙った損害に対して法外だとして，アメリカ政府内で自発的に日本に一部返還することが提案されたことを知るや支持に回ったという。そのようなアメリカに対し，英国の対応は異なっていた。日本に厳しい態度をとる英国の駐日公使パークスに対して批判的であったモースだけに，そのパークス宅に起居していたイザベラ・バードに対しても好印象は持てなかったことを中西は指摘する[(12)]。奇しくも，バードの北海道探訪はモースと時期的に重なっており，1878年8月13日から1か月ほどであった。

バードもモースも，ともに日本政府からの支援も受けていた点では共通しているものの，狙いはまったく別だった。アメリカに先駆けて，英国は日本アジア協会という組織を立ち上げ日本研究を行っていたが，その成果を踏まえたバードの目的は，キリスト教の布教が可能かどうかを確かめる

ことにあったと，金坂は述べている[13]。一方，モースの目的は東京帝国大学の動物学の博物館の充実であり，同行したのは矢田部良吉教授やその助手など数名であった。先の中西は，バードとモースの二人の目的の相違が，対立の背景にあることを指摘している[14]。

これまで述べてきた欧米人の北海道訪問とは異なるのがメイベルのケースであった。二十年近く時を隔てたということだけでなく，先に触れたように，皆既日食観測隊に合流するというのがメイベルの第一の目的であった。その観測地が北海道でも交通の便がよくない北見地方ということで，メイベルの旅は大変なものとなったが，裏を返せば，欧米人はほとんど訪れていないということで，彼女にとってはやりがいがあったといえるだろう。

さらに，モースからの収集依頼は，メイベルの好奇心に火をつけることになった。モースもバードも訪問地は北海道南部であり，北見地方までは足を伸ばしていなかった。アイヌ部落は北海道全土にわたって点在しているだけに，欧米人との接触がほとんどない地方に住むアイヌの生活を見聞できるということは，メイベルのみならず，依頼したモースにとっても期待が大きかったことだろう。

メイベルの『皆既日食とコロネット号』の中で，アイヌ関係の内容に割かれた部分は決して少なくない。メイベルは，観測拠点のある北見地方の枝幸を起点にアイヌ部落を回っている。次の節では，メイベルが観察したアイヌの住民とその生活について，特に彼女の関心を引いたと思われる事項を追う。メイベルはアイヌの伝説や伝承に関心を持ったようだが，エッセイ中に織り込まれた挿話などにも着目しながら，彼女の目に映ったアイヌの人々の暮らしと，伝統を重んじる文化の在り様を辿る。

メイベルの見たアイヌ

メイベルが見た北海道，とりわけアイヌに関わる描写は，『皆既日食とコロネット号』の25章より30章にかけて散見される。25章の副題は「幻影を追って」（“In Pursuit of a Shadow”）となっている。横浜港を出発して函館にいったん到着したものの，メイベルが乗った日本郵船の船は，北海道の最南端にあたる白神岬を回って小樽についた。札幌から陸路で北見地方に行くのは大変なので，宗谷岬を通る船を探すが，定期便はすでに出た後だった。不定期に来る小船が，数日待てば利用できることを知るが，8月9日の皆既日食観察に間に合わないことを恐れるメイベルのために，日本郵船の支配人の厚意で特別に船を手配してもらえることになった。さらに，メイベルは乗船中に洋食を出してもらえると書いていることから，旅行中の食事も大切な関心事であったことがわかる。ちなみに，モースの場合も，北海道の旅に同行した矢田部良吉によると，一日一食は洋食を望んだとのことである。

特別船の出立までに二日あったことから，メイベルは札幌観光を実行することになった。その札幌で，アイヌに会えるかもしれないと，メイベルは期待を膨らませていた。車窓から見る景色に詩的な日本を思い浮かべていたものの，札幌の街についたときその期待は裏切られたという。クラークが学長を務めた札幌農学校はマサチューセッツの農業大学校をモデルにしていたこともあって，札幌の街はアメリカ的だったと書いている。ここで，農学校ゆかりの新渡戸稲造と宮部金吾の両名の訪問を受け，手厚くもてなされる。アメリカの皆既日食観測隊の関係者ということで，メイベルの場合も，特別扱いを受けることになったのである。

新渡戸と宮部が札幌をいろいろ案内してくれたが，中でも印象に残ったのが博物館であったとメイベルは述べている。そこでメイベルは，アイヌ民族の生活用品から飾り物に至るまであらゆるものを目にすることになる。メイベルによると，その品目は，原始的な機織り道具，弓矢，白樺の繊維で作った衣裳，楽器などであった。

メイベルが書き記しているのは，新渡戸が優遇してくれたおかげで，めったに手に入らないアイヌの信仰に関する品々を購入することが可能になったことである。宗教や儀式にかかわる品々は，アイヌが手放すのを拒むので，入手はおそらく不可能だとモースが踏んでいたものだった。メ

イベルは札幌にいるうちに，アイヌのコレクションの核となるものをすでに取得したが，さらに，外国人が珍しい北見地方でアイヌに関する品々を追加したいという。こうして，再び乗船するまでの二日間は，たちまちのうちに過ぎたのであった。

とりわけ，メイベルが強調するのは，アイヌに生まれて初めて出会った時の印象である。アイヌの男性の服装や容貌などを詳しく描写するだけでなく，滅びゆく民と考えるメイベルは，ほかの原住民（来日途中，ハワイの原住民を訪問）に対する以上に感傷的な思いを募らせる。さらに，その息子らしき少年が，日本とアイヌの両方の特徴が混じる容貌で，学生服をまとい，アイヌ語で話しかけた父親に対し，日本語交じりの方言で応対する様にやり切れないものを感じたのであった。

26章は，「いまだに追いかけて」（“Pursuing”）となっている。ここでは，冒頭からアイヌの神話が語られている。メイベルの場合，物質的なもののみならず，精神文化を代表するアイヌの神話や民謡などに関心があったので，書き留めるようにしていたのであった。

彼女が関心を持った神話は次のようである。アイヌの国づくりは男神が東側，女神が西側を受け持った。女神は友人の一人であるアイオイナ　カムイの姉妹に会ったために話に夢中になり仕事をおろそかにしてしまう。そのため，男神が請け負った蝦夷地の東側は仕事がしっかりなされた結果，なだらかな海岸線になったが，女神が請け負った西側は，海岸線が粗削りで急な崖になったという。そのような西側を，海岸線にそって宗谷岬まで，メイベルたちの船は進むことになった。

途中，ニシン漁のために人口が急増した増毛に立ち寄ると，メイベルはそこを拠点としてアイヌの家庭を訪問している。この時，村の日本人たちが初めて見る外国人女性への好奇心で，船から降りてきた彼女の後を追ってずっとついてくることに悩まされたりもしている。彼女が訪ねたアイヌの老人は，息子のけがや自分の視力の衰えなど，一家が置かれた不遇についてきれいな日本語で説明したという。この老人の落ち着いた物腰に感銘を受けたメイベルは，アイヌの容貌や服装を改めて描写しながら，この民族は女性より男性の方が美しいと書いている。

この後，船が北進するにつれ，立ち寄った利尻島の鴛泊や礼文島の香深などの描写が混じる。メイベルは，香深で聞いた苦力の男らが歌うメロディを書き取ったが，西洋の楽器で演奏することは難しいと述べる一方，アイヌの労働歌は，その曲想が西洋人の耳にも心地よいと感想を述べている。このページには音符の挿絵もある。こうして船は稚内に入り，宗谷岬を回ると，翌朝の日の出までには目的の枝幸に到着した。

次の27章は，「北見の枝幸」となっている。文字通り，夫らの観測隊が皆既日食に備えて滞在している場所である。冒頭で触れた『コロネット号の思い出』によると，メイベルの到着は，皆既日食観測予定日の4日前の8月5日のことであった。

彼女が乗った船の船長も，枝幸は初めてだったらしい。枝幸は日本人にとってさえめったに訪れることのない場所であった。そのようなところで，英，米，仏，日とそれぞれの国の観測隊が準備を整え，皆既日食を待っていたのである。

27章は観測隊のことが中心になるため，アイヌに関しての記述は少ない。ただ，アイヌも日本人と共に漁師として働く姿が描写されている。枝幸もニシンのおかげで人口が増えており，30人から50人の漁師を雇う裕福な網元が出現しているという。そこで雇われている漁師の中にはアイヌが数多くいるとのことであった。網元になるような者は本土から移住してきた日本人であるが，開けつつある町の周囲にはアイヌの村落があり，日本人とアイヌとの共同体ができつつある様子がうかがわれる。

また，アイヌの体格や容貌についての描写が見られる。背は日本人より低いものの体格はがっしりしていて逞しい。家父長制が徹底していて，家長となる老人は髭を蓄え，頭の中央で分けた髪を垂らしているが，顔は穏やかで，古代の預言者のようだという。また，日本の皇室につながるものがなんでも崇められているというのが，アイヌの村人に対するメイベルの感想である。

もう一点，アイヌの伝説が紹介されている。カラスがなぜ丁寧に扱われるのかという話である。神の最大の創造物である人間が，太陽の熱と光が

なければ生きていけないことから，神に対抗する悪は，日昇よりも早くに起き，上ってくる太陽を飲み込んでしまおうとした。その阻止のために神より送られたカラスが，太陽を飲み込もうと口を開けた悪の口に飛びこみ，太陽を救ったという。こうして，カラスは崇められるようになったのである。その結果，横暴になったカラスは，現在では案山子さえも恐れることなく，その肩に群がり止まり木にするありさまだという。

札幌で，新渡戸らの厚遇を受けたメイベルだが，枝幸でも似たような経験をしている。町の有力者の家で同席したかつて知事経験者が，アイヌの生活にも詳しいことから，アイヌ部落を訪問したいメイベルのために一肌脱いでくれたのであった。この人物の名前こそ挙げていないが，アイヌ語に堪能だけでなく，アイヌ部落と人的なパイプがあることから，メイベルに馬で行けるアイヌ部落を案内してくれたという。アイヌの人々は恥ずかしがり屋なので，直接質問を投げかけると困らせてしまう恐れがあったため，この人物の仲介が功を奏した。モースに頼まれたアイヌの伝統品の収集なども，この人物のおかげで可能になったのである。

次の28章は，「アイヌの国にて」（“In Ainu Land”）となっており，文字通りアイヌに関する内容で満たされている。冒頭「アイヌ」か「アイノ」という呼び方の問題で始まり，毛深いといわれるが欧州人とさほど変わらないとして，ロシアの髭面の農夫くらいだとも述べている。また，ある人類学者は，アイヌはアーリア人の一種だと言い，ほかのものは，エスキモーに近いと説明するなど，人類学の論争が日本を巻き込んで起きていることがわかる。

今のアイヌは，おとなしく，支配者の日本人に従順だが，かつては宇宙の中心にいる民族だとして，独自の思想を強く持っていたという。その証拠として古い国歌を例に挙げる。「海の神々よ。目を開けてくだされ。どちらを向かれましても，アイヌの言葉がこだまする」というものである。

さらに，アイヌの人類学的分類に関する問題が紹介される。メイベルが，ある程度人類学について調べてきた様子がうかがわれる。アイヌの渡来以前の人々が日本人の祖先とするモースのプレ・アイヌ説から，アイヌ以前にいた人々（「コロポックル」と呼ぶ）を念頭に置いて話を進めるメイベルは，「コロポックル」という言葉を「穴に住む小さな人々」と訳している。アイヌは先住民のコロポックルを滅亡させたが，そのアイヌも12世紀には日本人との間で戦争を始めた。矢尻，手斧，骨，それに器類などの発掘された文物からは，日本人の短刀や刀などが容易く手に入るようになって影響を受けたことがわかる。それがなければ，アイヌの生活は石器時代と大差なかったのではないかと，メイベルは自説を述べている。

長年にわたって南部から北海道に追いやられたアイヌは，この文明化した時代に，昔ながらの質素な暮らしをそのまま維持している。彼らの起源は満足のいくような形で解明されていないが，今の日本人が到来する前から住んでいたことは，アイヌ語を起源とする地名がいたるところに残っていることから推察される。また，「われらの祖先が小舟でこの地に降りたったとき，島々に野蛮人が住み着いているのを見つけた。もっとも荒々しいのがアイヌであった」という一節が『古事記』にあると述べている。

アイヌの外見の描写には，当時の西洋人が考えていたアイヌ観が覗かれる。例えば，「野蛮人」というような書き方がそれに該当する。性格は単純でおとなしく，フォークロアが面白い。ただ，日本人と接触しながらも文明化されることがなく，文字も存在しないし，芸術は単純だという。偉大な指導者が出れば目を覚ますだろうが，それはないだろうというのがメイベルの意見である。

さらに，学校教育を受けている間はいいが，村に帰ると元のくらしに戻ってしまうのではないかともいう。既に，25章で，メイベルは，アイヌ部落にくらす父親と言語において断絶を感じている日本の学校教育を受けているアイヌの少年の例を紹介している。青少年に対し施される教育が日本への同化を促す一方，アイヌ部落に残る年長者との亀裂が広がってゆく現状を実感したのかもしれない。

同化政策に関しては，バードの場合は，41信で，アメリカ政府の北米の原住民（ネィティヴ・

アメリカン）に対する政策と比較して，日本政府（当時開拓使）のアイヌに対する扱いの方が人間的だと述べているが，メイベルの場合は自国の政策と比較する意思はなかったようである。

また，先ほどの元知事が案内してくれたのはポロナイボ村（現在名は不明）であり，普通なら見せてもらえないような珍しい習慣なども見せてもらったとメイベルは語っている。北海道南部にあるアイヌの村に，普通の日本人ガイドを連れて立ち寄ったとしても，ほとんど見せてもらえそうもないものを枝幸近郊では見ることができたと，元知事の厚意に感謝している。北海道南部は，1870年代にバードやモース，またそれより早い時期にH．シーボルトなどの西洋人が訪れていたことを念頭に置いての発言だろう。

また，自分自身についても，怪訝な目で見られることなく，厚遇されたといって喜ぶメイベルだが，アイヌの村人もふつう見ることができない外国人を直接みる機会を得て喜んだのではないかと考えた。このエッセイは『皆既日食とコロネット号』として出版される前に，雑誌に発表された。その折の書評は，「メイベルにとってアイヌは変な人に思えたかもしれないが，アイヌの人々にとっては，メイベルこそが奇妙な人と写ったことだろう」というものだった。

最後は，アイヌの住宅と生活様式についての説明である。メイベルは，アイヌはコンパスを持っていると主張する学者がいることから，どの家も戸口が同じ方向を向いていると思っていたが，実際はそうではなかったという。一応，神聖な方角というのがあり，また狩猟でとってきた動物の頭をかける場所などに決まりがあることを説明したうえで，来日途中に立ち寄ったハワイの原住民との比較に入るのだった。

被服，特に布についての説明に相当な量が割かれているのは，アイヌ文化を知るためには，布が果たす役割が大きいと考えたからであろう。また，文化を象徴するような調度については，酋長と思しき人物の家で観察している。ここで注目すべきは，義経伝説である。バードも平取のアイヌ部落に義経神社が存在していたことを記述しているが[15]，メイベルが聞いた話は，北海道に逃れてきた義経がかくまわれた箱が残っているという言い伝えである。追われていた義経が箱に入って安全なところまで運ばれたという。また，義経を描いた掛物があって，祭りの時に使用されるという風習を紹介した。バードとメイベルが調査の対象にしたアイヌの部落は異なるものの，義経はどちらのアイヌ部落にとっても重要な人物だったことがわかる。

19世紀末の女性の社会進出が見られる欧米からきたメイベルにとって，社会における女性の地位は大きな関心事であった。同性としての女性の描写にメイベルはページを割いており，男性に虐げられて，神に救いを求めることもできずに絶望的になった女性が，無謀にも自殺するケースがあることを伝えている。ちなみに，バードもアイヌの女性の部族の中での地位の低さが気になった。たとえば，バードが義経神社に行った折，アイヌの男性が階段を登るバードには手を差し伸べてくれたものの，同族の女性に対しては冷たかった。

また，女性の口周りの入れ墨については，その手順まで詳細に記述しているうえで，十年以上前に日本政府によって禁止になった旨も述べているのである。メイベルは，別の章で男性の方が女性より美しいと書いていたが，入れ墨が本来の美しさを損なわせていることを意識していたのではなかろうか。ただ，当時の日本人女性とは異なり，お歯黒の習慣がないことは評価しているのであった。

禁止といえば，入れ墨のみならず，狩りでの毒矢の使用も禁止になったことにメイベルは触れている。モースの『日本その日その日』の13章にも，アイヌが鏃に使用するトリカブトの毒は熊1頭を殺せるほど強いという表現が見られる。毒矢に関してはバードも紹介しており，バードを支援したH．シーボルトに至っては，「アイヌの毒矢」というような論文も発表しているのである[16]。入れ墨にしても毒矢にしても，アイヌ文化を象徴する代表的な物であった。社会の発展に伴って旧弊として，さまざまな習慣が禁じられたことをメイベルは惜しんだ。クマの数も次第に減り，開発が進むと，アイヌは滅びてしまうのではないかと危惧している。

すでに触れたが，メイベルのエッセイは，バー

ドに比べると量的にも圧倒的に少なく，それほどの入念な準備のもとで書かれたというような作品ではない。しかし，詩の編集などをしてきたメイベルは，本稿の随所で触れたように，神話や伝説などの側面からアイヌの人々とそのユニークな伝統文化を描こうとしているところに特徴がみられる。また，数字や細部に至る正確さを度外視して，外部者が日本の秘境に立ち入った時受けた感動を，感じたままに描写していると感じさせるところに，読者は引き付けられるのだろう。とくに，観察しようとアイヌ部落に分け入った彼女自体が，周囲のものから見れば被写体になっているということを知らされたところなど，ちょっとしたユーモアさえ感じさせられる。また，メイベルの場合は，取り立てて言うほどの使命感があるのでもなく，しいて言えば，モースの依頼があったというものの，好奇心のままに取材したのだった。それだけに，自由闊達に行動でき，体験したものを自分の言葉で描けたのではなかろうか。

最後に，夫らの観測隊は，夏の間は統計的に晴れの日が多いとされる北見地方の枝幸で観測に取り組んだが，運悪く皆既日食の起こる時刻だけ雲に覆われてしまったため観測は失敗に終わった。メイベルも涙を流すほどがっかりさせられたのだが，枝幸滞在には大きな副産物があった。それが西洋人は未踏のアイヌ部落訪問であった。

既に触れたように，アメリカを彷彿させる札幌の風景にその発展ぶりを見ているだけに，北海道といっても全く別の世界があることを観測地である北海道北東部で経験することになった。外国人が入り込んできている南部とは異なり，北東部は手つかずの自然に加え，独自の伝統文化を維持していたのである。ただ，そのような文化も少しずつながら近代化政策の余波を受けて変容しつつあることを実感する。発展と伝統文化の維持が，どこで折り合いをつけるのかというようなことまでは述べていないが，どこの国でも避けて通れない問題を考えるきっかけになったことだろう。

本稿では，メイベル・トッドが一人旅をしながら，夫らが観測の拠点としていた枝幸まで行く過程で見たアイヌの暮らしをはじめ，枝幸近郊に点在するアイヌ部落訪問で観察したアイヌの文化を彼女のエッセイを通して概観した。

注

(1) Mabel L. Todd, *Corona and Coronet: Being a Narrative of the Amherst Eclipse Expedition to Japan, in Mr. James's Schooner-yacht Coronet, to Observe the Sun's Total Obscuration 9th August, 1896* (Boston & N.Y.: Houghton Mifflin, 1899)
この書籍の大半を形成するのは，1896年の6月から10月にかけて*The Nation*に4回に渡って発表した“The Amherst Eclipse Expedition to Japan”(1)~(4)（それぞれ6月18日，7月30日，9月24日，10月8日号に掲載）。北海道のアイヌに関するものとしては，25章のもとになった “In Quest for Shadow: an astronomical experience in Japan,” *The Atlantic Monthly,* September,1897. ならびに28章の“The Ainoland,” *The Century*, July, 1898.

(2) Mabel L. Todd, 259.

(3) http://archive.org/stream/coronetmemories l00londiala 2016/09/06

(4) E.S. モース著，近藤義郎，佐原真　編・訳『大森貝塚』（岩波文庫，1983）　解説

(5) *Popular Science Monthly*, January,1879 (No.141)
http://en.wikisource.org./wiki/popular_science_monthy/volume_141

(6) 池田次郎「プレ・アイヌ説をめぐって」『人類誌』87(3)（1979），池田次郎『日本人の起源』（講談社現代新書，1982）

(7) 池田,「プレ・アイヌ説をめぐって」297.

(8) Edward Sylvester Morse, *Japan Day by Day*（N.Y. & Boston: Houghton Mifflin, 1917）

(9) 中西道子『モースのスケッチブック』（雄松堂，2002）306.

(10) 金坂清則『イサベラ・バードと日本の旅』

（平凡社新書, 2014）3,4章.

(11) 金坂, 252-53.

(12) 中西, 353-54.

(13) 金坂, 143-52.

(14) 中西, 354.

(15) Isabella Bird, *Unbeaten Tracks in Japan: An Account of Travels on Horseback in the Interior including Visits to the Aborigines of Yezo and the Shrines of Nikko and Ise* Vol.I & II（N.Y.: G.P. Putnam's Sons, 1881）1880年初版の再版。 第41信

(16) ハインリッヒ・シーボルト著，原田信男 ほか訳注，『小シーボルト蝦夷見聞記』（平凡社,1996）この中に，補論として「アイヌの毒矢」（『人類学・民俗学および原始学ベルリン協会論集』より）が含まれている。また，訳者の原田はこの書の巻末の「ハインリッヒ・シーボルトと北海道2」（271-73）の中で，モースやバード以外にもミルンやクライトナーなどの欧米人が同じころ相次いで北海道を訪れたことを記している。モースの関心は，あくまで北海道の動植物であり，文部卿の西郷従道から開拓使長官の黒田清隆宛への依頼状を携えており，政府がバックアップした旅であったことも伝えている。なお，バードは『日本奥地紀行』の第40信で，アイヌの村から帰ってきたシーボルトに会い，これから行くアイヌの村での生活についてアドバイスを受けたと書いている。